

タルキングホーンの死  
『荒涼館』とチャドウィック

長谷川 雅世

1851年の第一回ロンドン万国博覧会が象徴するように、1850年代初頭の英国は繁栄の道突き進んでいた。その頃に書かれ、“a fable for 1852”(Butt & Tillotson 179)と呼ばれる『荒涼館』(1852-53)<sup>1</sup>は、その英国の影の部分を描く社会批判の小説である。それゆえ、この小説には社会問題や社会悪を具現化した人物が多く登場する。例えば、偽善的で実効のない慈善行為を体現するパーディグル夫人やチャドバンド、支配階級の無責任や怠慢を典型的に示すデッドロック卿。そして、人々を不幸に陥れる大法官庁裁判所の遅延や怠慢は、大法官やそれに寄生するヴォールズら弁護士によって示される。この登場人物たちを、ディケンズは皮肉な視点から描き、彼らが具現しているものを批判している。

だが批判と言っても、それは徹底的に辛辣なものだとは言い難い。なぜなら、ディケンズは、パーディグル夫人やチャドバンドを滑稽に描くことで、彼らを嫌悪するよりも笑うべき人物に仕立て上げているからだ。また、エイダに優しく話し掛ける大法官や、妻を最後まで思い続けるデッドロック卿の姿を描くことで、彼らが愛すべき人間味を持っていることを付け加えているからだ。ところがその一方で、この小説には、読者に強い関心と嫌悪を生むが、好感や共感を一切抱かせない人物がいる。それは、弁護士タルキングホーンである。

タルキングホーンは、グリドリーやジョーなどの読者が強い同情を寄せる登場人物たちの敵として描かれる。読者が好感を抱くジョージも、タルキングホーンを「錆びついたおんぼろのカービン銃と同様に血も涙もない」(671)と評し、彼への反感を露わにする。さらに、ジョーやリチャードの死が愁嘆場として描かれているのに対して、タルキングホーンの死の場面には全く悲哀が感じられない。これらの事実は、タルキングホーンがこの小説で最も嫌悪されるべき者として存在し、ディケンズの最も強い批判の対象であることを示す。

このタルキングホーンは、従来の批評では、非情で機械的な法や制度を象徴或いは体現していると思なされ(Garis 137-38, Kettle 231-32)、オルタンスによる彼の殺害は、法や制度が冷淡かつ抑圧的に人を支配しようとする時の報いを意味すると解されてきた(Stoehr 165-68)。確かに、タルキングホーンがそうした一面を持っていることは認められる。だが、彼と同様に法や制度に深く関連しているにも拘らず、何の報いも受けない大法官やヴォールズに対する作者の微温的な態度と比較すれば、タルキングホーンの死には、従来指摘されてきた以外の意味もあると考えられる。そこで本論文では、タルキングホーンの死について再考し、その中で“a fable for 1852”と呼ばれる社会小説『荒涼館』の新たな一面を提示したい。

タルキングホーンの死を検討するために、まず、彼の人物像について考察する。この小説には、そのモデルが指摘される登場人物が多い。タルキングホーンの場合は、『緋文字』(1850)のチリングワースとの類似性が指摘されたことがある(Shatto 41-42)が、2001年に発表されたモリス(Morris)の論文では、実在の弁護士チャドウィック(Edwin Chadwick)とロベスピエール(Maximillian Robespierre)の名が挙げられている(690-91)。モリスは、パノプティックな規律権力をこの小説中で最も体現している弁護士タルキングホーンと、近代英国を専門化された規律と統制の体制へと導いた中央集権的機構の創設者であるベンサム主義者の弁護士チャドウィックの間に類似性が存在することを指摘する(689)。そして彼女は、権力に結びつく規律や統制を得るための手段である客観的事実や知識に対するチャドウィックの強い欲求と、それらを追求する際の恐ろしいまでの彼の自信と無慈悲さに注目し、これらの性格をディケンズがタルキングホーンに与えたと考える(690)。

確かに、タルキングホーンとチャドウィックには類似点がある。具体的な例を挙げると、タルキングホーンは「(心も口もほとんど)開かぬ牡蠣」(148)や「機械」(609)に例えられ、憐れみや良心の呵責などとは無縁で、仕事以外に何の関心も持たない人物として語られている(537)。そして彼は、2つの場所をいつの間にか「溶ける」(611)ように移動するという遍在性を持ち、彼の存在自体が「多くの神秘」(605)に包まれている。また、彼はデッドロック家のような大家の「法律上の秘密を司る執事」(21)であり、その「秘密を使って権力を得る」(537)人物である。

一方チャドウィックも、心をあまり開くことがなく、ユーモアや同情心をほとんど持たず、仕事が人生のような人物だった(Finer 2)。そして、彼は「役人精神を最も冷酷かつ非情な形で表している」と言われる(Woodward 434)。さらに、1854年にタイムズ紙は、チャドウィックについて“universal as he is, he is still more mysterious. That, in fact, accounts for his being everywhere, for what you find everywhere is always the most lurking or impalpable”(8 July)と述べて、彼の遍在性や神秘性を強調している。また、彼は職務上知りえた秘密を使って権力を手に入れようとする人物だった。救貧法委員会で得た情報を公表するという脅しをかけて、政府による衛生改革の有給職員の地位を手に入れたことは、その典型的な例である(Brundage 119-20)。

このような性格上の類似点から、タルキングホーンとチャドウィックには関連性が認められる。しかしこれ以外の観点からも、2人の関連性が指摘できる。それは、タルキングホーンと他の2人の登場人物エスターとジョーとの関係に見いだされる。

エスターとタルキングホーンの関係は、小説中で彼らが実際に接触することがないために、これまで注目されてこなかった。しかし、エスターの母親デッドロック夫人を媒介にして、彼らは関わりを持っている。タルキングホーンと夫人との関係については、これま

で幾つかの解釈がされてきたが、その多くは、ジョンソン(Johnson)のようにタルキングホーンが夫人を執拗に追い詰める動機が描かれていないと批判している(vol. 2, 765)。だが、その動機を考察している批評がないわけではない。例えば、ミラー(Hillis Miller)はタルキングホーンの行動を彼の権力欲ゆえとし(172-73)、ブレイン(Blain)は彼の女嫌いを動機とする(39)。さらに、クワーク(Quirk)は上の2つに加えて、彼を付屬的な価値ある所有物としか見なさない上流社会の高慢さへのタルキングホーンの憤りを挙げ、これら3つが相まってタルキングホーンの動機となっていると主張する(528)。上で列挙した解釈の中で、複雑なタルキングホーン像を最も巧みに解明しているのはクワークである。しかし、貧民墓地に埋葬された男の私生児を生んだ女としての夫人とタルキングホーン、さらには私生児エスターとタルキングホーンの関係に注目するならば、最も重要視すべきものは、クワークが「副次的な動機」(529)と考えるタルキングホーンの女性への嫌悪感である。

タルキングホーンには、女性は「世の全ての誤り(wrong)のもと」(238)であり、世に「面倒(trouble)」(613)を引き起こすために生まれたのだという女性観がある。さらに彼は、世に「誤り」や「面倒」をもたらす者がその罰を受けるのは当然だという応報の考えを持っている。このような女嫌いの女性観と応報の考えとが一体となって、私生児を生んだ、つまり「誤り」を犯し「面倒」を引き起こした夫人に対する彼の執拗な無慈悲さの原因となっている。しかし、彼の女嫌いをディケンズの考えの反映だとみなすブレインの解釈(39)に与することはできない。なぜならタルキングホーン的女性観と応報の考えは、ディケンズが反感を抱いていた1834年の私生児条項の思想と酷似しているからだ<sup>2</sup>。

私生児条項とは、以前の私生児法が改定されて1834年の新救貧法に条項として組み込まれたものである。この時の主な変更は、父親を突き止めて彼らに養育費を払わせることから、私生児を生んだ女性に全ての責任を負わせるようにした点にある。こうすることで、女性の偽証で謂れない責任を負わされることから男性を守ると同時に、不道德な女性が私生児を生むことを抑止できると救貧法委員会は考えた。これは、女性への性的嫉妬と偏見に基づいた二重基準の法であり(Henriques 103-14)、さらに、女性は「誤り」を犯し私生児という「面倒」を世にもたらす者だという考えと、それに対する辱めや罰を受けるのが当然だという考えが反映された法でもある。

このように、タルキングホーンがデッドロック夫人を追い詰める動機の根底には、私生児条項の思想と同種の女性観と応報の考え方があつた。そして、彼は夫人を追い詰めることで、彼女の私生児エスターをも追い詰める。エスターは、夫人に母親だと告白された時、タルキングホーンがその秘密を追求していることを知る。その結果、エスターは、自分が生きていることは「誤り(wrong)」であり、他人に「面倒(trouble)」をもたらすために生まれてきたのだと思う(539)。エスターのこの思い込みには、女性は「誤り(wrong)」を犯し「面倒(trouble)」を生み出すというタルキングホーンの考えが反映されている。こうすることでディケンズは、私生児エスターが母親を通して、私生児条項の思想を体現してい

るタルキングホーンに追い詰められるという構図を暗示している。

またジョーも、他の人物を介してタルキングホーンと関わりがある。その仲介役がバケット警部である。バケットは、ルーカス(Lucas)が指摘するように、機械的で冷徹に職務を遂行する点でタルキングホーンと類似している(215)。そのうえ、バケットはタルキングホーンの依頼でジョーを探し出し、次に彼が訴えたグリドリーを逮捕しようとする。また、デッドロック卿に夫人の秘密を暴露するというタルキングホーンの遣り残した仕事を代行し、彼を殺した犯人逮捕に従事する。さらに、病気のジョーをエスターの所から連れ出し、彼にロンドン近辺から消えろと命令する。その結果ジョーは病を悪化させ死に至る。タルキングホーンのためにジョーを連れ出したというバケット自身の言葉(808)も示唆するように、バケットは、タルキングホーンの分身としてジョーを追い詰めた。彼は、タルキングホーンの「復讐者」(Blain 39)とまでは言えなくとも、彼の分身的役割を果たしている。だからこそ、ディケンズは明らかに似ているにも拘らず、親交のあった有能なフィールド警部(Charles Field)とバケット警部との関連を否定した(*Letters* vol. 7, 149)のである。

さらに、有能で機動力を持つバケット警部は、1829年と1839年の警察法によって登場した新しいタイプの警官であり、林田氏は彼を「パノプティコン的予防警察の権化」(242)と言っている。つまりバケットは、それらの法を具現している。これらのことから、バケットを分身とするタルキングホーンは、1829年と1839年に制定された警察法の持つ法権力でジョーを追い詰めたと解釈できる。<sup>3</sup>

以上で考察したように、エスターとジョーは共に、タルキングホーンに追い詰められる。では、このことにはどのような意味があるのだろうか。このエスターとジョーの2人には、タルキングホーンに追い詰められること以外にも、多くの共通点がある。例えば、まず、彼らは共に両親の存在を知らずに育った孤児である。次に、彼らは同じ人物に所縁のある場所を住处にしている。エスターはトム・ジャーndイスの所有物であった荒涼館に住み、ジョーはトム・ジャーndイスの名を持つスラムをねぐらにしている。さらに、2人は「箒を持つアウト・ロー」という共通のイメージを持っている。ジョーは四辻掃除人(crossing-sweeper)で、“the outlaw with the broom”(235)と呼ばれる。一方、私生児であるエスターもアウト・ローであり、さらに彼女は、箒(broom)を抱えて空から蜘蛛の巣を払う(sweep)と童謡の中で歌われる「お婆さん」の異名を持っている(110-11)。最後に、ジョーの病がエスターに感染することは、彼らの強い結びつきを暗示している。これら多くの共通点から、ディケンズが、エスターとジョーを一对の人物として捉えていたと考えられる。

エスターの対となるジョーが、貧民問題を具現していることは明白である。バケットもジョーを「厄介な奴(the Tough Subject)」(331)と呼び、「とても哀れ(Poor enough)」で「とても厄介な(trouble enough)」(808)小僧だと言う。この言葉は、当時の英国における「厄介な問題(the tough subject)」だった貧民問題をジョーが体現していることを示唆し

ている。

一方、エスターの場合は明白ではない。しかし、彼女がジョーと一対の人物であることを考慮しながら彼女について読み解いて行くと、エスターもまた貧民問題に繋がった人物であることが分かる。例えば、まず、貧民女性ジェニーと関連させて描かれるデッドロック夫人<sup>4</sup>と貧民墓地に埋葬されたホードンとの間にできた私生児という設定は、エスターを貧民問題と結びつける。次に、エスターは養母であった叔母の死後、無一文で身寄りのない子供となる。語り手エスターはその時の自分自身を“the destitute subject”(31)と呼ぶ。ここでの“destitute”という語は、ディケンズの他の作品で“the Poor and destitute”(CC 11)や“London's destitute population”(OT 367)とあるように、貧民を指す語でもある。しかし、叔母の死後エスターは、救貧委員(guardians)が管理する荒涼たる救貧院(workhouse)の世話になるのではなく、ジャーナリスという“Guardian”(110)が現れ、彼が管理する荒涼館(Bleak House)に引き取られる。それゆえ、エスターは実際に「貧民(the destitute)」になることはなく、その結果、直接的に貧民問題を体現する人物にはならなかった。だが、上で挙げたエスターの描かれ方を考慮し、対であるジョーがエスターの回避できた人生を示す登場人物だと考えれば、彼女もまた貧民問題を内包する人物だと言える。

以上のようなエスターとジョーの人物像を考えれば、タルキングホーンが私生児条項と警察法を使って2人を追い詰める時、彼はそれらの法権力で貧民を追い詰めていると解釈できる。そしてタルキングホーンをこのような人物と解すれば、彼はチャドウィックと結びつく。というのも、チャドウィックは1834年の救貧法制定の立役者として知られ、私生児条項の草案を作り出した中心人物である。また、救貧法への反発を抑止するためにも必要とされた1829年と1839年の警察法にも、彼の考えが強く反映されている<sup>5</sup>。そして私生児条項も警察法も、その主な対象は貧民だった。だから彼は、「貧民の邪悪な敵」(Finer 69)と見なされた。このように、タルキングホーンには、モリスが指摘した権力を掌握するための知識欲や冷酷無情に目的を追求する姿、性格的特徴の点だけでなく、私生児条項や警察法を使って貧民を追い詰めるという人物像においてもチャドウィックとの類似性がある。

次に、タルキングホーンの死について考えてみよう。彼はオルタンスに殺される。この殺人は、本論文の冒頭で述べたように、法や制度が冷淡かつ抑圧的に人を支配しようとする時の報い、具体的にはオルタンスを代理としたデッドロック夫人の復讐を意味すると解釈されることが多い。確かに『大いなる遺産』(1860-61)のミセス・ジョー襲撃は、邪悪な分身オーリックを通して行われたピップの願望の成就と解釈されることがある(Moynahan 80-83)。だからタルキングホーンの殺害も、同様の読みをすることは可能だろう。だがこの殺人には、夫人の復讐以外の意味も読み取れる。なぜならオルタンスには、

フランス革命時の民衆のイメージが重ねられているからだ。

例えば、エスターに会いに来た時のオルタンスは、「大革命の恐怖時代のパリの街頭から来た女」(339-40)を想起させたと語られる。また、森でデッドロック夫人に冷淡に扱われた時、オルタンスは「復讐心」(277)を抱き雨で濡れた草の上を歩く。その時の彼女は、「血」(277)の上を歩いているとでも思っているのだらうと語られる。この描写は、彼女が「雌トラ」(773)に例えられる「黒髪」(171)のフランス人女性であることを考慮すれば、『二都物語』(1859)でのマダム・ドファルジュの描写「雌トラ」(447)のように復讐心に駆られ「おびただしい血」(452)の上を歩く「黒っぽい髪」(448)のフランス人女性を想起させる。実際にハッター(Hutter)も、オルタンスはマダム・ドファルジュの前身だと指摘している(103)。

そしてこのマダム・ドファルジュは、革命側の象徴的人物である。とすれば、オルタンスには、フランス革命で復讐に駆り立てられ蜂起した民衆のイメージが与えられていることになる。さらに、ディケンズにとってフランス革命とは、『二都物語』で明らかなように、ブルジョア階級ではなく「下層階級」(TTC 278)の反乱を意味していた。これら2つのことを考慮すれば、オルタンスには抑圧された末に圧制者に逆襲する貧民のイメージが付与されていることになる。すると彼女のタルキングホーン殺害に、暴君的なタルキングホーンに対する貧民側からの反逆という象徴的意味を見いだせる。すなわち、彼の殺害には、従来言われてきたデッドロック夫人の復讐だけでなく、私生児条項や警察法の法権力で彼が抑圧し追い詰めた貧民による復讐という意味が読み取れる。

ディケンズは、このような死を迎える人物のモデルにチャドウィックを選んだ。これには2つの理由が考えられる。まず、チャドウィックは、既に述べたように、救貧法や警察法で貧民を虐げていた。特に、バスティーユの牢獄と呼ばれる救貧院を生み出した救貧法以来、彼は「貧民の邪悪な敵」(Finer 69)と言われ、「英国一の憎まれ者」(Porter 247)となった。彼は、弱者、主に貧民を抑圧する非人間的な法や制度の典型と見なされていたのだ。だから、この小説で非人間的な法や制度を体現する登場人物タルキングホーンを創造する際に、ディケンズはそのモデルをチャドウィックに求めたと考えられる。そしてタルキングホーンの死は、チャドウィックが具現していたものへのディケンズの批判なのである。

次に、チャドウィックの公衆衛生改革に対するディケンズの不安が挙げられる。『荒涼館』執筆当時の1850年代初頭のディケンズは、英国が抱える社会問題の中で、衛生問題を第一の急務と考えていた。だから、1850年に創刊された *Household Words* で、彼はそれに関する記事を多く書いている。また、1850年の『マーティン・チャズルウィット』と『オリヴァー・トゥイスト』の廉価版の序文<sup>6</sup>でも、その問題に言及している。さらに、

ディケンズは 1848 年に Health of Town Association の一員となっている。

このようなディケンズは、義弟のオースティン(Henry Austin)を介して、公衆衛生改革の先達だったチャドウィックと接触を保っていた。ただし、この 2 人の関係について、ファイナーは、ディケンズは救貧法との関わりからチャドウィックに不信の念を抱き続けていたが、1847 年以降はチャドウィックの公衆衛生改革の擁護者になったと言う(239)。ブランデイジも同様の見解を示している(98)。確かに、1851 年の演説でディケンズは、チャドウィックと彼の衛生委員会を支持する立場を表明している(10 May, *Speeches* 128-32)。しかしこの小説執筆当時に、彼がチャドウィックに全幅の信頼を置いていたとは考え難い。その理由として次の 3 つが挙げられる。

第一に、ディケンズの不信感の最大の要因である救貧法に、チャドウィックが固執し続けていたという事実がある。ファイナーは、ディケンズの態度が「1847 年以降」に変化したとしている。確かに、1847 年にチャドウィックは救貧法委員会から離れている。しかし、その経緯について、チャドウィックは再編される委員会に入ろうと懸命に働きかけたが叶わず、結局退かざるをえなかったと言われている(Finer 274-91)。これに加えて、彼は 1834 年以降も変わらず救貧法の厳しい原則を求め続け、法が院外救済を認めるような穏健的なものであることに絶望して委員会を去ったとも言われている(Brundage 167-68)。彼が委員会を辞めたのは、救貧法に反発したからではない。

第二に、中央集権制に関するチャドウィックとディケンズの考え方の違いが挙げられる。チャドウィックは、救貧法や警察法の時と同様、衛生改革でも徹底的な中央集権制を唱えていた。それゆえ彼は、国民の私事に立ち入る侵略者だと非難され(Briggs 148)、さらに、同時代人から「プロシア的」と称されたり(Brundage 10)、英国の立憲政治を仏国の専制政治に代えようとしていると信じられていた(Morris 690)。また、首都下水委員当時、彼の横暴で専制的やり方が多くの非難を呼んで、1849 年にその委員会を去らざるをえなくなったほど、彼は反民主主義的精神の持ち主だった(Brundage 124-25)。

一方ディケンズも、衛生改革での中央集権制の必要性を強く唱えていた。だが彼の場合は、中央集権制の持つ干渉主義を完全に信奉していたわけではなかった。ヤング(Young)は、当時の国民の干渉主義と無干渉主義に対する複雑な感情を、ディケンズも抱いていたと指摘する(49-50)。ウェルシュ(Welsh)も、ディケンズ、特に後期の彼は干渉主義的傾向が強かったと主張するが、それに対する彼のアンビバレントな態度をも認めている(32-35)。

そしてそれは、公衆衛生改革に対するディケンズの態度にも見られる。彼はロンドンの住民は「中央委員会の管理下」に置かれるべきだと言い(6 Feb. 1850, *Speeches* 107)、衛生改革での中央集権の必要性を強く主張している(10 May 1851, *Speeches* 130)。しかし、一方で彼は、1853 年 2 月 1 日のクーツ女史(Burdett Coutts)に宛てた手紙の中では、家主たちに住環境を改良するための助言を与える必要性を説き、彼らの自身の行動が衛生環境の改善に繋がるという考えを示している(*Letters* vol.7, 20)。家主たち個人の責任に衛生改

革の方策を見ているこの主張には、ウェルシュが言うように無干渉主義的傾向が窺える(37)。さらに、*Household Words*の記事では、ディケンズは、労働者たちに衛生問題における彼らの自助を、具体的には、怠惰な政府に圧力をかけて衛生改革を進めるように主張している(“To Working Men”, 469)。また、ディケンズは衛生改革における中央集権制を「活発で日常的な職務の遂行と十分な医学的知識と国民の苦しみへの強い同情心の結合」と表現している(10 May 1851, *Speeches* 130)。この言葉が示すように、彼が思い描く中央集権制とは人道的な要素を持つものである。これらのことから、ディケンズの考える集権制は、チャドウィックが理想とする独裁的で圧制的なものとは異なっていることが分かる。このように、ディケンズはチャドウィックのような厳格な中央集権制への強硬な信奉者ではなかったことから、チャドウィックへの不安は依然として残っていたと考えられる。

第三に、公衆衛生改革におけるチャドウィックの動機に対するディケンズの不信が挙げられる。チャドウィックを常に突き動かしていたものは、「宗教心でも慈善の精神でもなく無駄に対する嫌悪」(Finer 3)や、「無駄と非能率への憎悪」(Englander 9)だった。そして、彼の救貧法や警察法を見れば、彼が何より嫌悪していた「無駄(waste)」とは貧民、特に被救済貧民(pauper)だったことは明らかである。こうした思想は、彼の生涯の事業であった衛生改革においても見いだされる。彼は、そこに入るぐらいなら働く方がましだと思わせる救貧院を作り怠惰な貧民を労働へ駆り立てたが、貧民の数は減らなかった。そこでその原因は病が労働を妨げているからだと考え、彼は衛生改革を政府による本格的な改革にしようとした(Porter 260)。またファイナーは、この小説が連載されていた頃に書かれたチャドウィックの手紙を引用して、チャドウィックの衛生改革は「人道主義」ではなく、救貧法の時と同じ「貧民者数を抑えるという狭隘な関心」によるものだったと言っている(157)。

一方、ディケンズは、1830年代中葉に議会報道記者として活躍していて、1834年の救貧法とそこに体现されているチャドウィックの考えを熟知し得る立場にあった。さらに、チャドウィックのお気に入り技師だったオースティンを通じて、チャドウィックの公衆衛生に関する考えも仔細に知ることができた。このような立場にあったディケンズは、チャドウィックの衛生改革の主たる目的が、貧民という「無駄」を減らすことだったのに気づいてははずだ。ディケンズは救貧法について、死ぬまで同意することがないと断言し(*Letters* vol.3, 330)、『共通の友』(1864-65)でも「救貧院の世話にならずに静かに死ぬこと」(503)がこの世での最大の望みであるヒグデン婆さんを通して非難している。そして、この救貧法の時と同じ貧民への憎悪がチャドウィックの衛生改革の動機だったことを、ディケンズは感じていたに違いない。

上述した3つの理由から、『荒涼館』執筆当時に、ディケンズが公衆衛生改革家チャドウィックへの不信感を払拭していたとは思われない。むしろ、彼はチャドウィックの衛生改革が救貧法の時と同様に貧民を抑圧するものになるのではないかという不安を抱いてい

たはずだ。この不安があったから、ディケンズは抑圧的で無情な法や制度を体現するタルキングホーンのモデルを、チャドウィックに求めたと考えられる。これが、チャドウィックがモデルに選ばれたもう1つの理由である。そして、既に述べたように、タルキングホーンの死は、非人間的な法や制度が人を抑圧した結果を意味していた。だとすれば、そこには、チャドウィックの衛生改革へのディケンズの警告という意味も含まれていると言える。

本論文で考察してきたように、タルキングホーンの死は、無情で非人間的な法や制度と、それらが人々、特に貧民を抑圧することへのディケンズの批判であった。さらに、彼の死には、ディケンズのチャドウィックの公衆衛生改革への不信感とそれへの警告という意味もあった。このことから分かる通り、タルキングホーンは、大法官やヴォールズとは違い、広範な法や制度だけでなく、公衆衛生改革という具体的なものとも深い関わりを持つ登場人物である。そして衛生改革とは、『荒涼館』執筆当時のディケンズの主たる関心事で、そのうえ、大法官庁裁判所改革と混沌とした政治状態と共に、この小説の主題の1つでもある。それゆえディケンズは、法や制度に関連した他の登場人物たちに対する以上の批判的な態度を、タルキングホーンには向けたのだ。

#### 註

<sup>1</sup> ディケンズの作品については、特に記載がない場合は全て Oxford World's Classics 版を使用する。尚、CC, OT, TTCは、*A Christmas Carol*, *Oliver Twist*, *A Tale of Two Cities* の略語である。

<sup>2</sup> 『オリヴァー・トゥイスト』(1837-9)で、ディケンズは「救貧委員会の方々が作った女性に関する賢明かつ人道的な規則」の1つとして、「以前のように男性に家族を扶養する義務を果たさせる代わりに、彼を家族から引き離して独身者にしてやること」(11)を挙げている。この皮肉な語りには、作者の私生児条項への批判が読みとれる。ただし、『オリヴァー・トゥイスト』では、父親探しの廃止とその結果生じる家族の離散が非難の対象であったのに対して、『荒涼館』では、私生児を生んだ母親の処遇へと焦点が移されている。

<sup>3</sup> コリンズ(Collins)が指摘している通り、ディケンズは新警察の熱狂的な信奉者で、それが『荒涼館』での警官の描写にも表れている(202-13)。ディケンズの批判はバケットら警官に向けられているのではない。ディケンズの批判の対象は、犯罪者予備軍である貧困者たちを厳しく監視することで犯罪は予防できるという考えに基づき作られた警察法が持つ非情な側面と、その法権力を使って人を抑圧しようとするものである。

<sup>4</sup> 2人の類似性は、小説中で次のように示唆されている。まず、夫人は出産直後に我が子を亡くしたとっていて、ジェニーは実際に嬰兒を亡くしている。次に、死の際に夫人はジェニーの衣服を着て貧民墓地の前で倒れている。そして、語り手エスターはその横たわる

夫人を「あの死んだ子供の母親」(915)、つまりジェニーだと言い、2人がエスターの語りの中で混同されている。さらに、タルキングホーンは夫人を「下層庶民(the commonest of commoners)」(602)に例えている。

<sup>5</sup> チャドウィックは 1829 年の警察法制定の委員会には入っていなかったが、彼の意見は重視され、シャトーが言うようにその年の警察法にも彼の考えが反映されている(108)。警察法(1829・1839年)とチャドウィックの警察に関する考えについては、Chadwick 252-308 と林田 83-144 を参照。

<sup>6</sup> 序文は、*Martin Chuzzlewit*, 717-18 と *Oliver Twist*(The Clarendon Dickens), 382-84。

#### 参考文献

Blain, Virginia. "Double Vision and the Double Standard in *Bleak House*: A Feminist Perspective." *Literature and History* 11 (1985): 31-46.

Briggs, Asa. "Public Opinion and Public Health in the Age of Chadwick." *The Collected Essays of Asa Briggs*, vol. 2: *Images, Problems, Standpoints, Forecasts*. Brighton: Harvester Press, 1985. 129-52.

Brundage, Anthony. *England's "Prussian Minister": Edwin Chadwick and the Politics of Government Growth, 1832-54*. University Park: Pennsylvania State UP, 1988.

Butt, John, and Kathleen Tillotson. *Dickens at Work*. London: Methuen, 1957.

Chadwick, Edwin. "Preventive Police." *Beyond Public Health: Poor Law and Police*. Ed. David Gladstone. 1829; London: Routledge/Thoemmes Press, 1997. 252-308.

Collins, Philip. *Dickens and Crime*. 1962; New York: St. Martin Press, 1994.

Dickens, Charles. *Bleak House*. Ed. Stephen Gill, Oxford World's Classics. Oxford and New York: Oxford UP, 1998.

. "A Christmas Carol." *Christmas Books*. Ed. Ruth Glancy, Oxford World's Classics. Oxford and New York: Oxford UP, 1998. 1-90.

. *The Letters of Charles Dickens*, vol. 3. Ed. Madeline House, Graham Storey, and Kathleen Tillotson, The Pilgrim Edition. Oxford: Clarendon Press, 1974.

. *The Letters of Charles Dickens*, vol. 7. Ed. Graham Storey, Kathleen Tillotson, and Angus Easson, The Pilgrim Edition. Oxford: Clarendon Press, 1993.

. *Martin Chuzzlewit*. Ed. Margaret Cardwell, Oxford World's Classics. Oxford and New York: Oxford UP, 1998.

. *Oliver Twist*. Ed. Kathleen Tillotson, The Clarendon Dickens. Oxford:

- Clarendon Press, 1974.
- . *Oliver Twist*. Ed. Kathleen Tillotson, Oxford World's Classics. Oxford and New York: Oxford UP, 1999.
  - . *Our Mutual Friend*. Ed. Michael Cotsell, Oxford World Classics. Oxford and New York: Oxford UP, 1998.
  - . *The Speeches of Charles Dickens: A Complete Edition*. Ed. K. J. Fielding. Hemel Hempstead: Harvester · Wheatsheaf, 1988.
  - . *A Tale of Two Cities*. Ed. Andrew Sanders, Oxford World's Classics. Oxford and New York: Oxford UP, 1998.
  - . "To Working Men." (*Household Words*, 7 Oct. 1854) *Charles Dickens: Selected Journalism 1850-1870*. Ed. David Pascoe. Harmondsworth: Penguin Books, 1997. 467-70.
- Englander, David. *Poverty and Poor Law Reform in Britain: From Chadwick to Booth, 1834-1914*. London and New York: Longman, 1998.
- Finer, S. E. *The Life and Times of Sir Edwin Chadwick*. Ed. David Gladstone. 1952; London: Routledge/Thoemmes Press, 1997.
- Garis, Robert. *The Dickens Theatre: A Reassessment of the Novels*. Oxford: Clarendon Press, 1965.
- 林田敏子. 『イギリス近代警察の誕生 ヴィクトリア朝ボビーの社会史』. 昭和堂, 2002.
- Henriques, U. R. Q. "Bastardy and the New Poor Law." *Past and Present* 37 July (1967): 103-29.
- Hutter, Albert. "Nation and Generation in *A Tale of Two Cities*." *Critical Essays on Charles Dickens's A Tale of Two Cities*. Ed. Michael Cotsell. 1978; New York: G. K. Hall, 1998. 89-110.
- Johnson, Edgar. *Charles Dickens: His Tragedy and Triumph*, 2 vols. New York: Simon and Schuster, 1952.
- Kettle, Arnold. "Dickens and the Popular Tradition." *Marxists on Literature: An Anthology*. Ed. David Craig. 1961; Harmondsworth: Penguin, 1975. 214-44.
- Lucas, John. *The Melancholy Man: A Study of Dickens's Novels*. 1970; Brighton: Harvester Press, 1980.
- Miller, J. Hillis. *Charles Dickens: The World of His Novels*. Cambridge: Harvard UP, 1958.
- Morris, Pam. "*Bleak House* and the Struggle for the State Domain." *ELH* 68 Fall (2001): 679-98.

- Moynahan, Julian. "The Hero's Guilt: The Case of *Great Expectations*." *Critical Essays on Charles Dickens's Great Expectations*. Ed. Michael Cotsell. 1960; Boston: G. K. Hall, 1990. 73-87.
- Porter, Roy. *London: A Social History*. 1994; Cambridge: Harvard UP, 1998.
- Quirk, Eugene F. "Tulkinghorn's Buried Life: A Study of Character in *Bleak House*." *Journal of English and Germanic Philology* 72 Oct. (1973): 526-35.
- Shatto, Susan. *The Companion to Bleak House*. London: Unwin Hyman, 1988.
- Stoehr, Taylor. *Dickens: The Dreamer's Stance*. Ithaca: Cornell UP, 1965.
- Welsh, Alexander. *The City of Dickens*. 1986; New York: toExcel, 1999.
- Woodward, E. L. *The Age of Reform 1815-1870*. 1938; Oxford: Clarendon Press, 1949.
- Young, G. M. *Victorian England: Portrait of an Age*. 1936; London: Oxford UP, 1967.

『コルヌコピア』14号(京都府立大学英文学会)pp. 19-34